特集●善光寺開創三十周年

はばたけ！ 新世紀へ

開創三十周年、育英会設立十五周年

駒沢女子大学長
文学博士
東 隆眞

成寿山善光寺は、昭和四十四年（一九六九）、黒田武志老師が御師父・黒田白純老師（栃木県大田原市、光真寺中興三十六世）を御開山に拝請して開創され、本年は、三十周年を迎える。

横浜善光寺留学僧育英会は、善光寺開創十五周年の昭和五十八年（一九八三）、現住黒田武志老師が発願して設立されたので、まさに十五周年を閲する。育英会は、寺檀一体の結晶として、この年、釈迦殿が完成し、その報恩行としての記念事業であったのである。

黒田老師は、善光寺開創の主旨を、釈迦殿の建立に寄せて、「釈迦殿の竣工は、宗祖を通して釈尊に還るという私の念願のあらわれであり、今後は釈迦殿を拠点とし、釈尊のみ教えを体して布教教化活動の充実に弄精魂の智をもって邁進する所存」だと明言する。

すなわち、善光寺は、釈迦殿を拠点として、第一に「宗祖（日本の曹洞宗においては、高祖

道元禅師と太祖瑩山禅師の両祖がこのことばに相当する）を通して釈尊に還る」ということ、第二に「釈尊のみ教えを体し」、第三に「布教教化活動の充実」に邁進するところに、その存在意義があると喝破している。これは、まさに、黒田老師、渾身心の誓願である。

この善光寺開創の根本精神は、大本山總持寺開山瑩山禅師の「瑩山今生の仏法修行は、この檀越の信心によって成就す……この故に、師檀和合して親しく水魚の昵をなし、来際一如にして骨肉の思いをいたすべし」の示訓にもとづいて、「寺とお檀家は水魚の交わり、骨肉の至情をもって堅く結ばれなくてはなりません。私も努力します。精進します」という運営の妙諦によってのみ実現するという信念である。

しかし、宣言、信念があって実践、行動がなければ、それは虚言、画餅にひとしい。老師は、一にも二にも実行の人であり、果断の人である。

その一端を、善光寺発行の『成寿』誌第六号（昭和六十二年一月二十日発行）によって見れば、

行事・日時

新年祈禱会
一月十日（土）午前十一時

節分会
二月三日（火）午前十一時

開山忌
二月七日（土）午後二時

青年会総会
二月二十一日（土）午後二時

春彼岸法会
三月十九日（木）午前十一時・午後二時

花まつり法会（婦人会総会）
四月八日（水）午前十一時
婦人会研修会
五月九日（土）
不動明王大祭　大般若法会
五月二十八日（木）午前十一時
大施餓鬼法会
七月九日（木）午前十一時・午後二時
七月十日（金）午前十一時・（初盆）
棚経（お盆供養）
七月十三日（月）～十六日（木）
光真寺参拝
七月二十三日（木）～二十四日（金）
医事・身上相談
九月十五日（火）午前十一時～午後一時
秋彼岸法会
九月二十一日（月）午前十一時・午後二時
七五三祈禱会
十一月十五日（日）午後二時
お茶会
十一月二十五日（水）午後一時～四時
成道会
十二月八日（火）午前十一時
写経会
毎月第二土曜日午後二時
参禅会
毎月第二日曜日午前六時
茶道教室（裏千家）
毎月第一・第三月曜日午後一時
書道教室
毎月第二・第四土曜日午後二時
成寿発行　年二回発行不定期
また、善光寺が頒布している『平成十一年不動明王運勢暦』には、
善光寺総代会　善光寺旅行会
善光寺護持会　善光寺福祉相談所

善光寺不動明王奉讃会　善光寺子供会
善光寺参禅会　善光寺茶道会
善光寺写経会　善光寺書道会
善光寺青年会　善光寺仏典研究会
善光寺婦人会　善光寺出版部
横浜善光寺留学僧育英会

など、諸行事、諸活動が掲げられている。

これらの布教教化活動を不退転の決意で実施し、継続して、文字どおり門前市をなす寺門の繁栄を招き、気がついてみれば檀信徒数千戸を数え、またたく間に横浜随一の活気あふれる善光寺となった。

横浜善光寺留学僧育英会は、「人材の育成をはかり、仏教を振興し、世界の平和と人類の進運に寄与しよう」という老師の宿願の実現である。若きころのタイ王国、ワット・パクナムでの僧院生活と、アメリカ合衆国、偉大なる開教伝道者、肉兄の前角博雄老師開創のロサンゼルス禅センターにおける開教従事の貴重な体験と将来の仏教界のあるべき方向性を洞察しての決断である。今や、世界十八か国（一地域）、延べ九十三人の留学育英生を数えるに至った。さらに、逐年、増員するから、近く百名に至り、百名を越えるだろう。善光寺一か寺の企てで、世界の潮流である国際交流理解を具体的に進めている日本仏教の典型がここにある。さらには、日本の善光寺を本拠地として、タイの上座仏教、アメリカ、ヨーロッパの禅センターないし研究機関を結ぶ世界的視野と国際的規模をもった仏教研修のシステムがここにある。まさに、日本仏教が現代の国際社会に自信をもって発信する聖業であると私はうけとめている。平成十年（一九九八）、スリランカ政府公認の慈善団体サラナンダ財団は、黒田老師に国際栄誉賞を贈って、永年の努力を高く評価した。また、平成十一年

（一九九九）、曹洞宗管長は、老師を表彰して、その労苦をたたえた。

ところで、西暦二〇〇〇年すなわち平成十二年は、わが曹洞宗高祖道元禅師のご生誕八〇〇年である。西暦二〇〇二年平成十二年は、道元禅師七五〇回大遠忌に相当する。いわゆる二〇世紀は道元禅師をもっておさめ、二一世紀は道元禅師をもってはじめなければならないと私は理解する。

この八〇〇年、七五〇年を迎えるにあたって、私どもは私どもの過去をどのように懺悔し、現状をどのように把握し、来るべき新世紀にどのような夢を実現しようとするのか。

このたび、開創三十周年、育英会設立十五周年の記念事業として、善光寺では開創三十周年式典、育英会設立十五周年式典、記念誌刊行、釈迦殿等修復、中国人画家周穎先生の十八羅漢屏風制作、墓地「横浜やすらぎの里」開園、ワット・パクナム訪問、中国天童山参拝などを計画しているということである。これ、また、いずれも、開創三十周年、育英会設立十五周年にふさわしい大事業である。

さて、三十周年以後はどうするのか。十五周年以後はどうするのか。

黒田老師は、私の大学、大学院時代の同窓、同学の畏友である。一緒に講義を受けた小川弘貫先生は、早稲田でも慶応でもそうだ、私立学校が名実ともにととのうには百年はかかるといわれた。

私立学校といっても学校差はあるし、寺院（宗教法人）と学校（学校法人など）とは基本的に異なる点がある。それはそのとおりだが、私は、黒田老師、善光寺を考えるとき、なぜか小川弘貫先生のことばを想起する。

考えようによっては、三十周年、十五周年は、まだまだ若い。これから五十周年、百周年、さ

らには五百周年、千周年を迎えなければならないのである。

善光寺黒田武志老師は、倫子夫人の最高、最大のご協力を基礎に、開基家、本寺、檀信徒、宗門、内外の関係各方面の総力を結集して、前進し、充実していってほしい。それは、開創、設立の原点を確かめ、時代に即応し、時代をリードしていく以外にみちはないであろう。つねにグローバルな視野に立ち、宗祖を通して釈尊のこころを学び、釈尊の教えを広め、自他ともに救われていく——善光寺の使命がここにある。耳を澄ませば、そのきざしの楽の音が、いよいよはっきりと天から聞こえてくる。

はばたけ！　新世紀へ。